

石狩偉人発見

石狩の偉人たち



アトリエ「石狩画廊」渋井一夫 渋井一夫の絵画について

渋井一夫(1933~1996)は、昭和37(1962)年に石狩浜に住所を移し、住居とアトリエを備えた「石狩画廊」を開きました。石狩の海をこよなく愛し、一年中石狩画廊を訪れる人を迎え入れ、本町地区の人たちとの交流も深いものがありました。

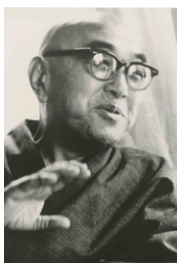
また、冬でも海水パンツ一枚で過ごすことから「裸の画家」とも言われていました。作風は海をテーマにした絵に詩を添えた独自のスタイルで、「自分の絵に、詩を書き、自分で写真を撮り、それが一つになって作品がうまれる」と自ら語っていました。

石狩浜を中心に北海道沿岸、日本沿岸、南・北フランス海岸と海岸沿いを製作旅行し、昭和37(1962)年から、毎年札幌で個展を開催している他、詩画集、写真集、エッセイ集等の著書も多数発行しています。

昭和42(1967)年から石狩町の観光ポスターを製作寄贈するほか、絵ハガキ、公刊行物、文芸誌書の装丁協力作成などの他、石狩浜に「ハマナスを大切に」という看板を自費で立て、海浜植物保護もしていました。平成8(1996)年1月、石狩画廊で死去。葬式は本町の能量寺で行われ、石狩画廊は同年5月に取り壊されています。

厚田区出身の著名人

道の駅石狩「あいーど厚田」2F文学・芸術コーナー



子母澤 寛 文学碑

子母澤 寛 (1892~1968)

石狩市厚田出身で、代表作に「勝海舟」「新撰組始末記」「厚田日記」など時代小説を書いた作家です。なかでも「座頭市物語」は勝新太郎主演の映画で大評判となり現在も映画界に大きな影響を与えています。



戸田 城聖

戸田 城聖 (1900~1958)

戸田城聖は創価学会第2代会長で宗教人として知られていますが、教育者、出版人としても活躍しました。昭和26(1945)年5月3日、創価学会第2代会長に就任。その後は学会組織の発展と宗教活動の指導力を発揮し、昭和33(1958)年にその生涯を閉じました。



三岸 好太郎 (1903-1934)

31年の短い生涯で独創的な作品を次々と発表し今日まで高い評価を集め天才と称されたひとです。明治36年(1903)年、札幌に生まれました。母イは子母澤寛の生母で好太郎はイの再婚相手とのことです。子母澤寛とは異父兄弟です。



吉葉山 潤之助 (1920~1977)

第43代横綱。本名は池田潤之輔は厚田区安瀬出身です。入門4年目で幕下優勝し、1954年に横綱に昇進。美男子でスタイルもよく人気がありましたがケガが多く1958年に引退し、引退後は宮城野を襲名し、多くの力士を育て上げました。



佐藤 松太郎 (1863~1918)

佐藤 松太郎は北海道屈指の鱈漁の網人で、文久3(1863)年、厚田郡安瀬村(現厚田区安瀬)に生まれました。大人になると厚田、浜益の沿岸にあった鱈漁場の大部分を経営し、大正7年の漁業者の長者番付「西の横綱」になっています。明治末期には加賀の北前船経営者である寺谷家と共同経営で海運業に乗り出し、11艘もの船を所有し、実業家としても大いに活躍しました。道会議員も務めました。